

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 5 日現在

機関番号：23903

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2016

課題番号：26861932

研究課題名(和文)子どもの声から作成する看護の自己評価尺度 - 病棟看護師用 - の開発

研究課題名(英文)Development of Hospital Nurse Self Evaluation Scale from Children's Voices

研究代表者

山口 大輔 (YAMAGUCHI, DAISUKE)

名古屋市立大学・看護学部・研究員

研究者番号：50622552

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：入院中の子どもが求めている看護師像の解明と、それに基づいた実践振り返り表の開発と効果の検証を行った。子どもは、看護師が子どもに関心を寄せること、子どもを尊重することや身体的精神的な苦痛軽減などを求めている。看護師は、実践振り返り表を使用する中で【経験的に学び大切にしていることへの肯定感と強化】がある一方、【子どもに対して援助ができていないことへの不安全感】を持った。さらに【今まで気づけなかった子どもの気持ちへの寄り添い】や【親ではなく子どもの気持ちを尊重する意識の高まり】があり、【実践振り返り表で気づいた点を基にした行動の変化】に繋がり、【自己の行動変化による子どもとの関係の深まり】に至った。

研究成果の概要(英文)：We investigated nurse's behaviors that hospitalized children are wishing and hospital nurse self evaluation scale based on children's wishes are developed and verified. Children wished nurses to be interested in them, respected children as a person, relieved physical and mental distress, and so on. Hospital nurse self evaluation scale provided nurses "Affirming and reinforcing empirically important thing". On the other hand, that provided "Feeling of insufficiency that nurses couldn't do good care". In addition, that would be continued "Closing with children's feelings that nurses couldn't perceive", "Improving a consciousness to respect not parent's but children's feelings", "Changing nurse's behaviors by perceiving to utilize hospital nurse self evaluation scale", and "Deepening relationship between children and nurse by changing nurse's behaviors".

研究分野：医歯薬学

キーワード：子ども 看護師 相互作用 実践振り返り表 入院 質的研究

1. 研究開始当初の背景

1994年に日本で批准された子どもの権利条約等から、医療において子どもを尊重し中心として捉えることが求められており、看護師は子どもの思いを考慮した上で最善を尽くしている。しかし、実際自己表現能力が未熟である子どもの思いを十分に把握することは容易ではない。そのため、これまで先行研究の多くは、子ども自身を理解するために子どもの親や看護師に調査を行っていた (Charles J et al.,1999;Vasiliki M et al.,2011)。

関連する先行研究として、国外では看護師に対する子どもの考えについて調査研究が行われている。子どもの考える看護師のポジティブな行為について、必要な時にケアを提供できることや個人を尊重できること、穏やかな性格、笑顔、子どもの好きな話ができるなどがあり (Randall et al.,2012,2008; Brady,2009;Pelander T et al.,2004)、ネガティブな行為として、私を起こすこと、傷付けることなどが挙げられていた (Ryan-Wenger NA et al.,2012)。国外に比べ国内の先行研究は少なく、入院体験を数名の子どもに調査した研究の学会発表に留まっている (渡辺ら,2004;松井ら,2005)。そこでは処置が嫌だったなど限られた結果であった。

国外の先行研究を中心に、看護師に対する子どもの考えが明らかになってきている。しかし、実態把握の調査に留まっており、その結果を基に発展させた研究はない。また退院時のアンケートなどで病棟全体の看護を評価することはあるが、看護師個人が自分の看護について客観的に振り返る機会は少ない。そこで今回、看護師が自分の看護を振り返り、子どもの思いを意識した関わりができるように、実践振り返り表の開発に取り組んだ。

2. 研究の目的

- (1)入院中の子どもが看護師にどのような思いや感覚を抱いているのか明らかにする。
- (2)その結果を受けて、入院中の子どもが求めている看護師像に基づいた看護師のための実践振り返り表を作成する。
- (3)看護師が実践振り返り表を用いて自己評価することで、子どもに対する看護師の態度や行動について、どのような気づきや変化があるのかを明らかにする。

3. 研究の方法

<入院中の子どもの看護師に対する考えについて>

(1)研究デザイン

質的記述的研究

(2)研究参加者

愛知県内の病院の小児病棟または小児が入院している病棟に入院中の学童期 6-12 歳の子どもとした。

先行研究でも子どものインタビュー調査は、親など大人の介助があれば6歳前後から

可能であり (Ryan-Wenger et al.,2012;Varni JW et al.,2007)、さらに面接に同席した親は、子どもの発言を前向きに引き出し、援助すると言われる (Gardner et al.,2012)。そこで本研究でも参加者を学童期に設定した。

参加者の選択基準として、子ども自身で自分の考えを話すことができること、精神発達遅滞がないこと、面接に耐えうるほど心身の状態が安定していること、子どもとその親が研究内容と方法を理解し文書による同意が得られていること、以上の条件が揃っている場合に調査を行った。

(3)データ収集方法

研究の同意の得られた子どもに対して半構成的面接を行った。面接は子どもの希望する場所・日時に行い、子どもの面接時の親の同席については子どもの希望により決定した。同席した親はときに子どもの発言を制限、誘導してしまうことがあるため、事前に親に子どものサポートに徹してもらい、できるだけ親自身の意見を控えてもらうよう依頼した。

インタビューガイドを用いて、入院中の看護師に対する考えについて答えてもらった。具体的な答えを子ども自身が話ることができるように配慮した。面接内容はメモをとり、ICレコーダーで録音した。

面接前に子どもの年齢等の属性については、親に書面で記載してもらった。

(4)データ分析

質的帰納的分析を行った。録音データとメモから逐語録におこし精読した。参加者ごとの逐語録から「子どもが思うよい看護師の態度と行動」に関係する箇所を抜き出した。その際、研究者や親が発言した内容に子どもが同意のみしている場合は採用せず、子ども自身が自分の言葉で表現している箇所のみを採用した。子どもが語った言葉をできるだけ意味内容を損なわないようにコード化し、類似性により集約してサブカテゴリー、カテゴリーを抽出した。カテゴリー化までの分析の過程で意味内容の類似性と差異性を明らかにし、継続的比較を行った。繰り返し逐語録に戻り、命名の妥当性を吟味した。分析結果について継続的に小児看護専門の研究者からスーパーバイズを受けて検討を重ね、修正を加えて一貫性・妥当性・確証性を高めた。

(5)倫理的配慮

所属大学の研究倫理委員会と調査施設の研究倫理審査の承認を得た。病棟看護師長より対象者の選定と研究者の紹介をしてもらい、許可が得られた場合に研究者から説明を実施する。まず親に、研究目的と方法、参加の自由、拒否・中断の自由等を文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。その後子どもに、子ども用の説明文書を用いて、研究目的と方法、参加の自由等を説明し同意を得た。

今回子どもに入院中の出来事を振り返ってもらい、心身の苦痛を思い出すという負担があるため、子どもの様子を注意深く観察し

て、子どもの負担感が強いと判断された場合は継続意思確認後に中止した。

<子どもの求めている看護師像に基づいた看護師の実践振り返り表の開発および活用>

(1) 研究参加者

現在小児病棟で勤務し、小児看護の臨床経験を3年以上有する看護師とした。

(2) データ収集方法

一回目の調査

事前に実践振り返り表で自己評価してもらい、実践振り返り表の中で気になった項目を中心に、半構成的面接を行い、子どもに対する看護師の態度や行動について、どのような「気づき」があったか質問した。

一回目の調査後も実践振り返り表の内容を確認できるように、実践振り返り表の項目を記載した用紙を渡し、始業前や休憩中に適宜内容を確認して、意識してもらいながら、子どもと関わってもらった。

二回目の調査

一回目の調査から2週間以上空けて、同じ看護師に改めて実践振り返り表で自己評価してもらい、その後半構成的面接を行い、子どもに対する看護師の行動や態度について、どのような「気づき」や「変化」があったのか質問した。

面接はメモをとり、ICレコーダーで録音した。一回目の面接の際に年齢等の属性について口頭で質問した。

(3) データ分析

参加者ごとの逐語録から「看護師が実践振り返り表を用いて自己評価することで、子どもに対する看護師の態度や行動について、どのような気づきや変化があったか」という視点で、関係する文脈を抜き出し、参加者が語った言葉をできるだけ意味内容を損なわないよう見出しをつけた。その中から類似性を見つけ出し、テーマを抽出した。テーマの類似性と差異性を確認しながら参加者間の比較を行った。また繰り返し逐語録に戻り、テーマ名の妥当性を吟味した。

(4) 倫理的配慮

所属大学の研究倫理委員会と調査施設の研究倫理審査の承認を得た。病棟看護師長から対象者の選定と紹介をもらい、研究依頼の説明許可が得られた場合に、研究者から説明を実施した。研究目的と方法、参加の自由、拒否・中断の自由等を文書と口頭で説明し、文書で同意を得た。面接は面談室等のプライバシーの保たれる場所で行った。

(5) 実践振り返り表について

先に明らかにした子どもの求めている看護師像に基づいて、試作版実践振り返り表を作成した。次に妥当性と簡明性の検討を行うため、機縁法により小児看護経験8年の看護師、小児病棟の看護師長、小児看護学の大学教員、小児看護学の大学院生の4名に、試作版実践振り返り表を確認してもらった。その

後専門家会議を開き、目的や内容の理解しやすさ、文章の表現や言葉の使い方、文章の順序、記載の方法、実践振り返り表の構成について、意見をもらった。専門家会議の結果を基に、実践振り返り表の改訂を行い、完成版とし調査に使用した。参加者の属性は文書で記載してもらった。専門家会議については、文書を用いて依頼内容と参加の自由等を説明し、文書で同意を得た。

4. 研究成果

<入院中の子どもの看護師に対する考えについて>

25名の子どもに面接を行った。平均年齢は9歳、平均入院期間は43日、平均入院経験回数は3回、平均面接時間は15分3秒、疾患は慢性肉下種、骨形成不全等であった。

子どもが求めている看護師の態度と行動について分析した結果、5の大カテゴリー、14のカテゴリー、29のサブカテゴリーが抽出された(表1)。大カテゴリーは【】、サブカテゴリーは「」で示す。大カテゴリーは【子どもを励まし、入院生活を楽しませてください】、【子どもの身体的精神的な苦痛を配慮し、優しく行動してくれる】、【子どもの様子に注目して、積極的に行動してくれる】、【子ども自身を尊重して行動してくれる】、【いつも看護師が明るく優しく接してくれる】であった。以下に各大カテゴリーの構成を示す。

(1) 【子どもを励まし、入院生活を楽しませてください】

「子どもと一緒に遊んでくれる」「子どもの好きな話を一緒にしてくれる」「子どもが落ち込んでいるときに、励ましてくれる」「子どもの励みになるよう身の周りのものを工夫してくれる」「普段と違うことをして、楽しませてください」「病棟でイベントを開いて招待状をくれる」から抽出された。

(2) 【子どもの身体的精神的な苦痛を配慮し、優しく行動してくれる】

「子どもが痛くないように、できるだけ優しく行ってくれる」「子どもの恥ずかしい気持ちに対して配慮してくれる」から抽出された。

(3) 【子どもの様子に注目して、積極的に行動してくれる】

「子どもが聞いたことに、素早く答えてくれる」「子どもが困っていることに対応してくれる」「いつも体調を心配してくれる」「付き添い者がいないときに、心配して声をかけてくれる」「手術室に行くときに、一緒にいてくれる」「子どもの状況を考えて、看護師が自ら行動してくれる」から抽出された。

(4) 【子ども自身を尊重して行動してくれる】

「子どもに嫌なことをするときには、確認して返事を待ってくれる」「子どもに関係することを子どもが選べるようにしてくれる」「子どもの話を丁寧に聞いてくれる」「子どもに関係することを誠実に扱ってくれる」

「子どもに対して分かりやすく説明してくれる」「丁寧に保清を行ってさっぱりさせてくれる」「規則と子どもの生活のバランスを調整してくれる」「子どもに合わせて距離感を保ってくれる」「子どもが頑張っていることを誉めてくれる」「子どもの頑張りに対して、ご褒美をくれる」から抽出された。

(5)【いつも看護師が明るく優しく接してくれる】

「明るく接してくれる」「看護師の話し方が優しい」「看護師がかわいい」「いつも笑顔で接してくれる」「いつも看護師から気さくに声をかけてくれる」から抽出された。

入院中の子どもは知らない人やものに囲まれ、医療者主体で治療やケアが進むことも多く、普段の自己を脅かされやすい。入院中の多くの子どもは看護師のケアを肯定的に捉えている (Norena P AL, Cibanal J L, 2011)と言われるが、今回子どもが語る中で、看護師が子どもに関心を寄せて関わることや、子どもに注目して積極的に行動すること、身体的精神的な苦痛軽減、子ども自身を尊重して行動することなど、日常では見えにくかった、多様で具体的な子どもの思いが明らかとなった。入院中でも子どもが自分らしくいられるように、看護師は常に子どもの状況や気持ちに注目し、自身の態度や行動を顧みる必要性が示唆された。

表1 入院中の学童期の子どもが求めている看護師の態度と行動

大カテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
子どもを励まし、入院生活を楽しくしてくれる	一緒に会話や遊びを行って、子どもの入院生活を楽しくしてくれる	子どもと一緒に遊んでくれる 子どもの好きな話を一緒にしてくれる
	子どもの励みになるように、言葉や身の周りのものを工夫してくれる	子どもが落ち込んでいるときに、励ましてくれる 子どもの励みになるよう身の周りのものを工夫してくれる
	子どもを励ますために、特別なことをしてくれる	普段と違うことをして、楽しませてくれる 病棟でイベントを開催して招待状をくれる
子どもの身体的精神的な苦痛を配慮し、優しく行動してくれる	子どもの身体的精神的な苦痛を配慮し、優しく行動してくれる	子どもが痛くないように、できるだけ優しく行ってくれる 子どもの恥ずかしい気持ちに対して配慮してくれる
子どもの様子に注目して、積極的に行動してくれる	子どもに対して素早く対応してくれる	子どもが困ったときに、素早く答えてくれる 子どもが困っていることに対応してくれる
	子どもの不安を察知して、状態を気にかけて行動してくれる	いつも体調を心配してくれる 付き添い者がいないときに、心配して声をかけてくれる 手術室に行くときに、一緒にいてくれる
	子どもの状態を考えて、看護師が自ら行動してくれる	子どもの状態を考えて、看護師が自ら行動してくれる 子どもに嫌なことをするときには、確認して返事を待ってくれる 子どもに関係することを子どもが選べるようにしてくれる
子ども自身を尊重して行動してくれる	子どもが自分のことを自分で決めるために行動してくれる	子どもの話を丁寧に聞いてくれる
	子どものことを丁寧に誠実に行動してくれる	子どもに関係することを誠実に扱ってくれる 子どもに対して分かりやすく説明してくれる 丁寧に保清を行ってさっぱりさせてくれる
	規則と子どもの生活のバランスを調整してくれる 子どもに合わせて距離感を保ってくれる 子どもが頑張っていることを認めてくれる	規則と子どもの生活のバランスを調整してくれる 子どもに合わせて距離感を保ってくれる 子どもが頑張っていることを認めてくれる 子どもの頑張りに対して、ご褒美をくれる
いつも看護師が明るく優しく接してくれる	子どもに対して明るく優しく接してくれる	明るく接してくれる
	いつも看護師がかわいく接してくれる	看護師の話し方が優しい 看護師がかわいい いつも笑顔で接してくれる
	いつも看護師から気さくに声をかけてくれる	いつも看護師から気さくに声をかけてくれる

<子どもの求めている看護師像に基づいた看護師の実践振り返り表の開発および活用>

5名の看護師に2回ずつ面接を行った。平均年齢は29.6歳、看護師経験は平均7.6年、小児看護経験は平均7.4年、平均面接時間は37分8秒であった。

看護師が実践振り返り表を用いて自己評価することで、どのような気づきや変化があったかという視点で分析を行った結果、【経

験的に学び大切にしていることへの肯定感と強化】、【子どもに対して援助ができていないことへの不全感】、【今まで気づけなかった子どもの気持ちへの寄り添い】、【親ではなく子どもの気持ちを尊重する意識の高まり】、【実践振り返り表で気づいた点を基にした行動の変化】、【自己の行動変化による子どもとの関係の深まり】という6つのテーマが抽出された。

看護師は、子どもの求めている看護師像に基づいた実践振り返り表を使用する中で、【経験的に学び大切にしていることへの肯定感と強化】がある一方、【子どもに対して援助ができていないことへの不全感】を持った。さらに【今まで気づけなかった子どもの気持ちへの寄り添い】や【親ではなく子どもの気持ちを尊重する意識の高まり】があり、【実践振り返り表で気づいた点を基にした行動の変化】に繋がっていた。その結果【自己の行動変化による子どもとの関係の深まり】に至っていた。

以下に各テーマの内容について示す。

(1)【経験的に学び大切にしていることへの肯定感と強化】

看護師は経験的に子どもとの向き合い方を学んでおり、その結果として自身が子どもと向き合うときに大切にしていることについて、実践振り返り表を使用する中で、肯定感を抱き、強化されていた。

(1回目の実践振り返り表の記入を終えて)「全体的にはこう、看護師として子どもに接する時にやった方がいいのかなっていう事を、やっぱりみんな感じているのかなと思いました。」(29歳、看護師B)

(2回目の実践振り返り表の記入を終えて)「こう引っかかることが増えたっていうか。考えれば分かるんだけど、流れちゃいがちなことをちゃんとこう止め、流さないようにしてくれるのかなって思いました。あとやれることは、ああこのままやろう、みたいな風に。」(27歳、看護師E)

(2)【子どもに対して援助ができていないことへの不全感】

看護師は実践振り返り表を使用する中で、大切だと知っていたことや知ったことを、実際に行動できていない自分に気づいたことを語っていた。

(1回目の実践振り返り表の記入を終えて)「つけていて結構やってるやっているとついながらも、でも忙しい時にそれを実際にやってるかなとか、こう余裕がない時に子どものことを思ってできてないかなあって。あっ、こういうことでできてなかったなって思う部分もチェックしながら感じました。(中略)注射絆に絵を描いたりとか、ちょっと頑張ったシールやってみたりとかも、比較的それこそ(異動前の病棟)にいた時は結構積極的にやってたんですけど、(現在の病棟)に来て自分もこういっぱいいっぱいだったりとか、あと結構こう治療に慣れてる子達も

多くて、ついついまあそれがなくてもできてしまう環境の中でやらなくなってる自分もいるなあっていうのを感じました。」(26歳、看護師D)

(1 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「(中略)振り返ると当たり前だなと思うんですけど、じゃあいざ意識してるかと言われたらできてないなあって、ちょっと反省するとか、そんな感じでした。」(27歳、看護師E)

(3)【今まで気づけなかった子どもの気持ちへの寄り添い】

看護師は経験的に学び、おおよそその子どもの気持ちを想像して援助を行っている。今回実践振り返り表を使用する中で、今まで気づけてなかった子どもの気持ちを知り、寄り添うことを意識するようになっていた。

(1 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「ここはそうなんだって思いました。可愛いと思えるように接しているとか、その考えはなかったです。(中略)あんまりそういうの気にしてないのかなと思ってたんですけど、あっそういう所見てるんだなと。」(26歳、看護師D)

(2 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「清潔ケアとかも、カーテンは閉めてるけど、本人達はもう脱いで早く着替えさせてわーみたいな感じだから、早くやってあげた方がいい時もあるから、なかなかそこまでタオルで隠してとか、そういうのにやっぱり気づけないとか、あんまりできなかつたけど、なんかそういうちょっと恥ずかしいとかそういう気持ちにも、ちゃんと学童だから寄り添わなきゃとか、っていうのはすごい意識はするようになりました。」(30歳、看護師C)

(4)【親ではなく子どもの気持ちを尊重する意識の高まり】

小児看護の特色の一つとして、対象が子どもだけでなく親も含めるところにある。保護者である親と比べると言語化が苦手な子どもの気持ちは置き去りにされ、医療者と親の間のやりとりが優先されることがある。今回実践振り返り表を使用する中で、子どもを一個人として尊重することの大切さが語られた。

(2 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「元々その子の気持ちとか意思とかを尊重したいとは思っていたんですけど、そうですね。やっぱりお母さんの代弁を聞くことが多くて。なかなかこうお母さん経由で三角で話したりとか、そういうのが多かったんですけど。そうですね、直接聞いた方がいいかなと思って。お母さんが不在の時にお部屋に行ったりとか。もともと意識してたんですけど、ちょっとそういう意識が強くなったかもしれません。」(29歳、看護師B)

(1 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「この誠実に扱っているか扱っていないかで、親を多分見がちな、子どもの看護って親を見がちになると思うんですけど。なんか子

どもは一個人であるっていうところをやっぱ尊重していかなくちゃいけないから。なんか親・・・、親の意向も汲みますけど、子どもが一番近いところから見るとっていうところは多分すごい大事なのかなって思うんですけど、捉え方自体は多分そんなに変わらないけど、でも一個人として捉えなきゃっていうことが。」(30歳、看護師C)

(5)【実践振り返り表で気づいた点を基にした行動の変化】

看護師は実践振り返り表を使用する中で、新しく気づいたことや、以前から大切にしていたことの肯定感と強化、理解していたが行動できていなかったことを認識した。その結果として、子どもに対する行動の変化に繋がっていた。

(2 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「(実践振り返り表で気づいた点として)ちょっと褒めたらうんって、うん。離床した子を、うわっすごいよ。こんなココ(創部)切つてね。2日3日でトイレ行って歩いてまた戻るなんて、なかなかできんよって。これ出来たらまあ今後訪れる色々な困難も乗り越えられるよって言うような感じで。まあ褒めたんですよ。そしたら結構ね、嬉しかったみたいで。」(36歳、看護師A)

(2 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「(中略)今までだと結構時間でしょうがないっていう部分があったりとかして、先にやっちゃってた所を、ちょっとしっかり説明をする時間を持ったりとか。頑張った後のシール渡してみたりとか。そういう部分は意識できたのかなと。こう忙しく回ってる中でも、ちょっとこう気に掛けて一言声を掛けてみたりとかを意識して動いたかなあと。前回の(実践振り返り表)やってから、自分ちょっとこう出来てなかったなあって思ってたので。なんか意識に繋がったかなって思いました。」(26歳、看護師D)

(6)【自己の行動変化による子どもとの関係の深まり】

看護師は実践振り返り表を使用することで、その内容から自身について振り返っていた。その結果、積極的に子どもと遊びを行ったり、子どもの好きな話を一緒にしたりと行動の変化があり、子どもとの関係性が深まったことについて語られた。

(2 回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「僕はこの遊ぶ時間をちょっと設けようとしております。で具体的にはトランプしたり、この設問2(子どもが好きなことについての話を一緒にしている)にも繋がるんですけど、話を聞くってことも大事なあとと思って。あの最近流行ってるの何とか、世間話を積極的に意図的にちょっと行うように心掛けました。はい。僕今まであんまりこういうところを、まあ分かっちゃいるけどやってはなかったなあという風に気づいたので、ちょっとやってみようと思って。(中略)僕がいつも質問する内容だと『うん』『いいえ』で答えら

れるぐらいだったけど、積極的に話をしてくれるので。(中略)その意外な一面だったり学校での生活だったりが見て取れて、ああ良かったなあと。」(36歳、看護師A)

(2回目の実践振り返り表の記入を終えて)
「個人としてそう声を掛けて、で、まあ小学校低学年の子とかも悩みは聞けないにしろその子の好きな遊びとかを、これ好きなとか話し掛けるように気を付けることで、看護師さんというくくりじゃなくて個人としてこう印象に残っているのかな。」(29歳、看護師B)

今回看護師は、子どもの求めている看護師像に基づいた実践振り返り表を活用する中で、新しく気づいたことや、以前から自身が大切にしていたことの肯定感と強化、理解していたが行動できていなかったことを認識していた。さらにその結果として、子どもに対する行動の変化に繋がり、中には子どもとの関係の深まりを実感したことも語られていた。看護師は子どもへの援助を行う中で、経験的に学習しているが、中堅看護師に実践振り返り表という形で自律学習を促すことは、様々な気づきと行動変化があるという効果が認められた。また本研究成果は、新人看護師等への教育プログラムの作成や子どもにとって質の高い看護の評価指標に繋がると考えられる。今後はこの気づきや行動変化が子どもにとって意義があったか検証が必要である。

以上、研究成果について現在論文投稿準備中である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表](計1件)

山口大輔、堀田法子、入院中の子どもが求めている看護師の態度と行動、日本小児看護学会第26回学術集会、2016年7月23日、別府国際コンベンションセンター(大分県・別府市)

6. 研究組織

(1)研究代表者

山口大輔(YAMAGUCHI DAISUKE)

名古屋市立大学・看護学部・研究員

研究者番号：50622552